30

故松原三郎博士遺品中の一文書

――イディッシュ語で書かれた医史学史料

泉[1]　彪之助・正橋[2]　剛二

故松原三郎博士は、旧金沢医科大学初代の精神医学教授である。松原博士遺品の文書類の調査を行った正橋は一枚の文書を発見し、泉が検討を行った。この文書は、ニューヨーク市衛生局が一九〇七年にユダヤ人移住者のために作成した結核の予防・治療に関する広報文書で、イディッシュ語（Yiddish）で書かれている。松原博士が、米国留学中に収集されたものと思われる。

イディッシュ語は東欧系ユダヤ人の共通語で、中高ドイツ語（Mittelhochdeutsch）を基礎とし、ヘブライ語、ポーランド語、ロシア語などが加わって生まれた言語である。文字は、ヘブライ文字を用いる。この文書は、我国で発見された医史学史料中、イディッシュ語で書かれた最初のものでないかと思われるので、その内容と言語・社会的背景について報告する。

一九世紀末から二〇世紀はじめにかけ、ロシアに起こったユダヤ人迫害などの理由で、二〇〇万人以上のユダヤ人がアメリカに移住し、その九五％が東欧系であった。中でも多数がニューヨークに移住し、一〇年間に五五万人が増加、その大部分がマンハッタン南部のローワーイーストサイドと呼ばれる地域に住んだ。過密から多くの社会問題が起こり、その一つが病気、とくに結核で、一九〇六年、同地域のユダヤ人一〇〇〇人中一二人が結核患者であったという。この文書は、そうした状況を背景に作成されたものである。

文書は四頁からなり、第一頁は表題。第二頁は結核の予防法で、身辺の清潔と、「たんを吐くな」ということが強調されている。第三頁は結核患者の養生法で、栄養・大気・安静を最良の治療法としている。他人に伝染させない方法として、「たんを吐くな」ということがやはり重視されている。第四頁は結核患者の無料診療を行う病院・診療所のリストで、医療機関名、住所、診療時間などが書かれている。この文書に用いられたイディッシュ

語は標準イディッシュ語より文体が古く、ドイツ語により近い。

この文書の医学的内容には、次のような特徴がある。

（一）結核対策を集団的施策によらず、「たんを吐くな」というような個人的方策によっていること。ここには集団検診や隔離などの記載はない。これは対象集団が大きすぎて集団的に処理できなかったこと、集団的手法の未確立、集団的施策がアメリカ文化の性格になじまなかったことによるものであろう。

（二）早く受診すれば完治するとあり、広報文書としては当然かも知れないが、結核治療法が確立していなかった当時としてはやや楽観に過ぎよう。

（三）結核患者の無料診療を主として民間の施設によっていること。後にニューヨーク市は市立病院を設立して貧しい患者の無料診療を行うが、この時点では、そうした方針はとられていない。

この文書には書かれていないが、当時すでにマウント・サイナイ病院などユダヤ系の病院が設立され、またユダヤ人団体が活動しており、そのためユダヤ系住民の結核患者は、数は多かったが死亡率はもっとも低かったという。

この解読と平行して、正橋は極めて近似した内容の英文文書を発見した。この文書は、結核の予防・治療についての内容はほとんど同文である一方、いくつかの点で明白な差異がある。両者の関係は、今後さらに検討したい。

定住外国人の増加により、我国でも行政当局が広報文書を日本語以外の言語で作成することが行われている。イディッシュ語文書は、そうした時代の医史学研究に言語研究が重要であることを、多文化社会、多言語社会アメリカの状況から示唆しているように思われる。

（介護老人保健施設　陽翠の里[1]、（医）白雲会[2]）